

長谷部史親

探偵小説談林

探偵小説は「謎々」の文学化であると云はれるが、その反面に人類の犯罪そのものへの潜在的興味が重大な要素となつてゐることは云ふまでもない。

長谷部史親

探偵小説談林

六興出版

1988

〈著者略歴〉

長谷部史親（はせべ・ふみちか）

1954年東京生まれ。早稲田大学法学部卒業。専門書店勤務を経て現在は自営兼フリー・ライター。『ミステリマガジン』『本の雑誌』などの雑誌や新聞にコラム、書評を執筆。

埼玉県浦和市在住。

探偵小説談林

昭和63年7月18日 初版印刷
昭和63年7月25日 初版発行

著者 長谷部史親

発行者 賀来壽一

発行所 株式会社 六興出版

東京都文京区水道二―九―二

郵便番号 一一二

電話 03(943)3431

振替 東京 1192448

印刷 中央精版印刷株式会社
製本 大日本製本株式会社

©1988 Fumichika Hasebe

落丁・乱丁の節はお取り替え致します。

ISBN4-8453-7159-6 C0095

探偵小説談林 ● 目次

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

1

“一冊の本” 10

日本最初の翻訳探偵小説とその周辺 15

ホームズ短篇および『黄色の部屋』の本邦初訳 20

戦前期翻訳探偵本十選 25

A・M・ウィリアムスンと矢野虹城 30

「鼻欠け三重殺人事件」雑考 35

事件調書仕立ての探偵小説 39

フルトン・アワスラーの生涯とその著作 44

ビーストン再評価の機運と経歴の補足 49

警察官用テキストとしての犯罪実話集 54

蟹足男の復活 59

奇書『趣味の科学探偵』 64

名著選定父子二代 69

2

小泉信三と探偵小説 76

日夏耿之介と探偵小説 80

丸尾長頭と探偵小説の因縁 85

帰郷後の雨村 90

杉村楚人冠の翻訳探偵小説について 94

大田黒元雄とセイヤーズ 98

二冊の『女優奈々子の審判』 102

鴨居羊子と江戸川乱歩の対談 108

3

江戸川乱歩と“索引の思想” 114

乱歩が愛用した参考図書二種 118

保篠龍緒の学術論文 123

小田律と《西洋講談》 127

岡戸武平のこと 132

吉良運平と江杉寛 137

『世界探偵秘史』と坂部護郎について 142

ある禁書とその周辺 147

島崎コレクションの散逸 151

横溝正史氏の死を悼む 155

小泉喜美子さんの急逝を悼む 159

岡戸武平追悼 164

4

『トップ』の創刊と終刊 170

『宝石』完全蒐集の茨の道 175

季刊『創造』のチェスタトン特輯号

『雄鶏通信』とその終末 184

5

涙香・素人『美人の獄』の原型とその周辺

196

丸亭素人と『鬼車』そのほか

207

南陽外史と『魔法医者』

226

あとがき

252

索引

装帧 高麗隆彦

探偵小説談林



“一冊の本”

少年時代に初めて読んだ探偵小説のことを考えると、話がいささか出来過ぎのような気がしないでもない。題名にひかれて何気なく手に取ったのが、講談社の《少年少女世界文学全集》に収録されていたポオの「モルグ街の殺人事件」であり、次いでドイルの「緋色の研究」ほか短篇であった。つまりまず最初にポオを読み、次にドイルを読んだわけだから、正統的という意味では運に恵まれていたといえる。その背景には、当時さかんにテレビ画面をにぎわしていたアメリカの刑事・探偵ドラマへの興味もみのがせない。

そのあとに、毎週通っていた公共図書館の児童図書室で、探偵小説らしきものを漁っては借りて行く日々が続く。その中で比較的まとまったものとしては、あかね書房の《少年少女世界推理文学全集》（全二十巻、昭和三十八～四十年）があげられる。これはポオ、ドイルに始まって、ルブラン、チェスタートン、カー、クリステイー、クイーンなど世界の名作級の作品を少年向きに短くリライトしたものが中心であり、リライトそのもののよしあしはともかくとしても、装幀、挿絵などに斬新さを盛り込んだ丁寧な編集ぶりであった。当初全十巻の予定のところ、好評だったせいかさらに十冊を追加し、ちょうどこれを読んでいる最中であつた私は、とても嬉しかったという記憶がある。

ただこれらは図書館でも人気者で、いつも誰かに借りられてしまっており、書棚に揃って収まっていたためしがないから、その間隙を縫うように全巻読破するまでには結構な時間がかかったものである。目当ての本が借りられないときには、仕方がないのでかわりに何かほかのものを借りてゆくわけだが、これは本当にどんなものでもよく、《岩波少年文庫》《世界名作全集》はおろか、偉人伝から交通史、産業史などにも及んだ。子供のころの記憶というのは案外と確かなもので、このころに得た些末な知識が今でもときおり役に立つことがある。

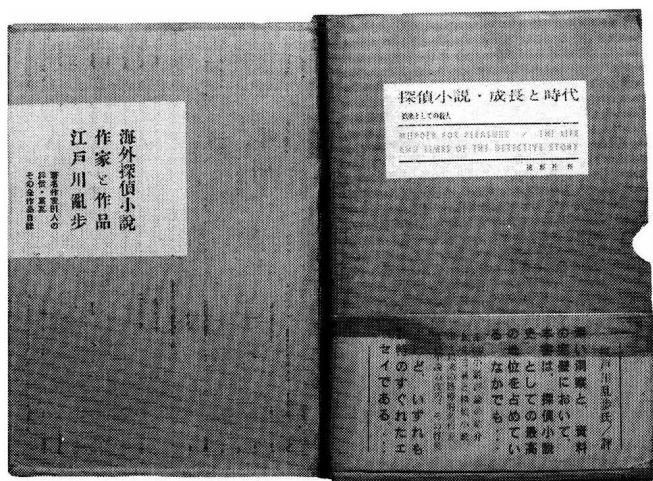
図書館への行き帰りの途中に、昔からの古本屋が一軒あって、そこで例によって山中峯太郎のホームズ、南洋一郎のルパンなどを安く見つけることができた。同じポプラ社から出ていた《世界推理小説文庫》（全三十巻、昭和三十七―三十八年）の端本もあった。これはハーマン・ランドン、サックス・ローマー、マッカレー、サッバーといった、戦前に人気を博したショッカー・ノヴェルのライトが主軸で、今思うにこれはこれで充分に面白いのではあるが、謎解き一辺倒のファンでしかなかった少年にとっては、あまりに活劇調が強すぎて楽しめなかった。江戸川乱歩の計報を聞いて『少年探偵団』を買いに走ったこともあるが、これも活劇調だったものだから、さして熱中することもない。少年探偵団シリーズの魅力がわかるようになるのは、もっと後年のことに属する。

やがて古本屋でも、児童書ばかりでなく、一般書の探偵小説が目につくようになり、東京創元社の《世界推理小説全集》の端本やハカワ・ミステリを三十円とか五十円で買う味を覚えた。そのハカワ・ミステリ版のどれかの巻末で、江戸川乱歩の『海外探偵小説作家と作品』の広告を見ているうちに、何が何でも欲しくなってきた。私はいきなり新刊書店へ赴き注文を出した。新刊書店で特定の本を注文できるということを、小学生の私がどうして知っていたかはわからないが、その書

店は地方都市にしてはわりあい大規模で、客注専門のカウンターがあり、そこで大人の客がしていることを見ていて学んだのであろう。とにかく私は、そのカウンターの前に立って、はにかみながら出版社や書名など所定のデータを申告し、保証金の百円を置いて立ち去ったのである。そしてほとんどなく待望の本が届き、差額を精算して持ち帰った。

この本との出会いは、言葉では言い尽くせないほど衝撃的であった。私が生まれて初めて、自らの意思で欲しいと思い、大人のまねをして新刊書店で注文して取り寄せた本である。親から買い与えられた本しか持たなかった少年にとっては、まさに掌中の玉であった。この本だけは特別なのであるという思い入れが強かったためか、私はこの本に綺麗なカバーを施し、さらに本来ついていた段ボールの函とは別に、ボール紙を買って来て自製の函を拵えたものである。その日からこの本は私にとってのいわば「バイブル」になった。

そもそも『海外探偵小説作家と作品』とは、乱歩がハヤカワ・ミステリに寄せた解説文の集成を主眼とした本であるが、その文章の端々からは、探偵小説の全体像を見据えた確固たる視座が窺われる。これを読むように読みながら、私はそれまで知らずにいた探偵小説の真髄に深く分け行つてゆくという実感に、胸のときめきを禁じ得なかった。少なくともここでふれられている作家と作品には、くまなく目を通しておきたいと思うと同時に、文中で再三言及される『幻影城』『続幻影城』をも読みたい、ぜひ手に入れたいという気持ちも膨らんでくる。『海外探偵小説作家と作品』で味をしめた私は、ためらうことなく書店に『続幻影城』の注文を出したが、すげなく絶版の返事が返ってきた。それなら古本屋へ行けば何とかなるのではと、以前に足しげく通ったところに加えて、何軒かの古本屋を巡り歩くうちに、ある店の棚でついに『続幻影城』に出くわすことができた。ま



たそれからややあって同じ店で『幻影城』も見つけた。『続幻影城』の付け値は六五〇円、『幻影城』の方は八〇〇円であった。これらを買うために私は、文字通り乏しい小遣いを底の底まで使ったのである。これは古本屋で定価より高く本を買った初の体験でもあった。

ほかにも思い出は数々ある。たとえば『海外探偵小説作家と作品』の中では、ヘイクラフトの『娯楽としての殺人』への言及もすくなくあつた。当然のようにこの本に対する関心も大いにかきたてられたが、悲しいことにしばらくのうちは、これに邦訳があることを知らずにいた。それがたまたま『探偵小説・成長と時代』の邦題で桃源社から出てくることを知った私は、やはり早速書店に駆けつけて注文を出し、例によって百円の保証金を置いた。十日ばかりたって、そろそろ本が来ているのではないかと思つた私は、注文控えを握り締めて書店の注文カウンターに出頭した。遠くから注文書の棚を眺めた私の目に、はたして『探偵小説・成長と時代』と黒

のである。(〇一・セ・ハ・カ・リ)

本“との出会いは、おそろく海外探偵小説作家と作品『海外探偵小説作家と作品』をとおいては語れないのでないかと思う。翻つて見ると、私は、乱歩の隨筆や研究を通じて、探偵小説に關する知識の乏しさを、情報整理して行く手順や、文章を書く基本姿勢など有形無形の恩恵を蒙つてゐる。私にとつての“一の冊

などというは、考へて見るといふ面妖な話である。い讀みしてゐた。小学がカレンのうちに、緒にハインリッヒをして通學してゐた。いながら思ひ置してやつてやつと買えただけであつて、私はしばしばこの本をたえず携帯して暇さえあればそし、八〇円を頂きすといわれた。財布の中は、身は百数十円不足してゐた。私はやむなく本を戻し、差額大書された黄色い背表紙が目に入り、勢ひ込んで店員に声をかけると、定価が六〇円なので